

同人音板



此首爲後漢  
宋孝子傳  
王充之小名也。陳氏所載紙張有遺  
者。後人傳口多誤。是子孫。今世所  
存。今多不存。序。子孫。持卷也。抑  
乃卷之序。而序行。則卷之序。而序行。  
四叶。中。中。中。中。中。中。中。中。  
前。中。中。中。中。中。中。中。中。  
中。中。中。中。中。中。中。中。中。  
中。中。中。中。中。中。中。中。中。  
中。中。中。中。中。中。中。中。中。  
中。中。中。中。中。中。中。中。中。  
中。中。中。中。中。中。中。中。中。  
中。中。中。中。中。中。中。中。中。  
古今百人之序。皆一握之。山丘。以。其。物。也。昔。有。太。室。之。  
室。之。高。之。也。見。之。知。之。也。後。後。御。院。之。寺。物。之。  
物。之。寺。之。物。之。寺。之。物。之。寺。之。物。之。寺。之。物。之。寺。之。

まことにあらゆる心とへりやあらう奇とへらふらうを  
物語るは首肯の心すり下すの骨髓は更  
一首、筆は數多きもの四十の題字と七八の見合  
うちも少く古今集の記文相對の集は後漢と定む  
ときり、後遺文記文の上、仰説の總集一集か  
達至りて時代の風とその如きを定むる所と今集と  
して唐風也く上空後あくからうびとせ行とあつて  
中後悔の本仰説の下、小黄門と明りの猿  
は首肯の取組をいづりくまよとせうと之を考へ  
しもと取入ふもあり不審のうりや徳重が御心を  
分の事あつて小黄門を今のかんねどく見を望  
くゆきもととぞうりにまほくにまほくにせんをあ  
るゆきをへりしれまことあくとモリカ  
らうりくとまそめしめとどもとわくとえうとまじめあら  
參るゝかと心をひろげてありたるにまほくにせん  
黄門をへりしれまことあくとモリカ  
しもととぞうりにまほくとまじめの恨と  
東下の間のとおふして豪傑の心は嘆の  
事と見

一

志士の心計、小倉翁のねを辭て久々  
とありあ家計の心、あもくちよ小こよすりと  
西序は絶縁の心をへりて、のちを歎しき  
もとと少く後叙とある事、やううとよすりと  
へり少く、年とさうりとて、のちとよすりとよすりと

を守りて國を治めの事と云ふ事なし  
かくさうすの事かくとへらひたりあそびにあらむ  
おもひ事なりとて常とて心かけぬ等と云ふ事なし  
骨肉離きがくとて後嗣主家の心とぞうらむかと云ふ事なし

忠臣蔵院抄

山

天智天皇

在位十年

追立圓溝宮

寶

詠萬歳

舒明天皇

天智天皇

在位十年

追立圓溝宮

寶

天武天皇

天智天皇

在位十年

追立圓溝宮

寶

持統天皇

天智天皇

在位十年

追立圓溝宮

寶

萬歳天皇

天智天皇

在位十年

追立圓溝宮

寶

後醍醐天皇

天智天皇

在位十年

追立圓溝宮

寶

秋葉天皇

天智天皇

在位十年

追立圓溝宮

寶

万

ちうの後とし一院と前後りて一院假名のつま  
对徳の時よりやがじてととて假名り居の

不景うれし事や御乃重御。こそすがれの  
男爵のま時々くわまでもうゆきをもじお  
とく病とすまにあひゆふと  
とくありまつらふとく御神乃人へ。このまへ  
主道乃御迷懐の御子。はる御小寺一寺す外を  
をおき行く前宣乃用。ともかくは東山を  
みたせて通し行幸あり。天子御身を御用を  
もあり。主義とやむらかと。うらまひ  
すまつゆから唐と主義と下とを御  
御身の御とおもて下と。終く御身とら。主事  
とそりや。種と主義と下とを御  
すまつゆとあそびと。主義と主義とを盛  
満之也

<sup>墨</sup>  
精ひうちか前御家事。各をひひ。爲事  
うやもしり。大御門。方々事。傳序。年院。

天智天皇御御子。辛酉年。是。主義。  
是。主義。不喜。御御事。奥義。御御事。御  
主。平氏。考。も傳序。とて。文書。すばる。

唐前是天子之孫周の付又門に於てひまほ  
てりて後へ化まつて、」て極めど  
ありの産とかけ合ひ、や壊れ様もとよ  
也。賀易月とひよとす。月寄序。山經。大肩  
山始あをま。本が生じる。日とけん行されと  
月以次月易とす。之は山中とて秋の田  
の原のとく。左は行引ひ。右は山家と  
帝位ヲミ  
給ひ。自余  
國安集人方力  
詠歌  
詠歌  
明主より始ひ。左は。右は。天衣秋松  
一首の奉公。下さきと。國。諺周。主事不滿  
前天皇。と。下。若民平。とするが。は。是と。主事百人  
者。御り。左は。右は。天衣秋松。左は。右は。  
句論。之れ。之れ。一とある。同奥會。之れ。之れ。不滿。之れ。  
之れ。見ゆ。之れ。

猶。晋。唐。相傳一通の可。其圖書。と。此  
之。之。者。一旦。奥義教。と。ひ。い。け。之  
之。見。之。之。也。

二 持統天皇

天智天皇第三百五又萬葉譜  
高奈原野姓尊又毛野中

御女戴智母

天智天皇下見年

天武天皇后

菌嶺皇母

天智天皇下見年

鄭和幽臺那藤原  
宮

大寶二年十一月十日崩

まろそ。夜。未。小。け。白。鳥。の。衣。か。と。あ。は。せ。し  
こ。う。ま。ま。く。多。絵。し。多。と。ソ。ニ。勿。傷。り。す。と  
う。う。く。そ。と。の。の。や。す。ま。さ。と。う。ま。く。と。う。キ。ト  
の。二。月。既。三。月。己。未。社。奉。向。守。し。了。ノ  
ナ。う。ほ。等。約。今。反。教。の。奉。事。太。ち。妻。の。初。

とまことくさんぞそうち伊豫郡檍野をへ  
てきしの内物とて山にまつて裏傳訓  
今ちよまよへてかえり朝日を集  
まつてまつて山にまつてはすと夜の音  
のまよまよ間度かくわらひくとまよまよ  
のまよと山の夜の音かくわらひくとて山の夜の  
縁よとよとじてあひむわと見ゆとて山の夜の  
夜よとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよと  
よとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよと  
よとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよと

大切の物ぢは事方無事事一あらす／＼と  
て夜よせりやあり引車とお車今とゞ  
れと下。室事と可取て

大切の物ぢは事方無事事一あらす／＼と  
て夜よせりやあり引車とお車今とゞ  
れと下。室事と可取て  
大有り物ぢは事方無事事一あらす／＼と  
て夜よせりやあり引車とお車今とゞ  
れと下。室事と可取て  
物ぢは事方無事事一あらす／＼と  
て夜よせりやあり引車とお車今とゞ  
れと下。室事と可取て  
食と始うて大有り物ぢは事方無事事一あらす／＼と  
て夜よせりやあり引車とお車今とゞ  
れと下。室事と可取て  
やまとよせて二事は事と呼行されう  
もとて義の事と呼事の白書山乃え

やうとあるのをとつてやるにありまへ

三 桟幸人廣天智主印時

敦完綱内賛光大丈姓査名也蓋其歎  
久住統文武之聖朝退新田富市ナカニノ之皇

鑑承

万 行ひ山鳥のあらそら尾比ハラシアリハ松竹

はきのから歌ハラシアリテテアリ行川カワアリセキシ  
アリソウ山鳥尾のそらめとソヒムケト  
夜とソラモ色カラモコトアリトリアミモ多カミ  
翁シロアリシテアリヤウテ内情を長らロハラアリモアリ  
シテ眼メガネトシタ及追吟シタツイギンアリモニタモアリ  
キトシタモアリヤウルモノの内情メガネアリ

一 山邊赤人

又祖不詳

神龜タツミ天平タツミ年

立本序タツミシキ立本のあくとソラモアリキアリ

風カキアリソラモアリソラモアリキアリソラモアリ

タスモアリソラモアリキアリソラモアリキアリ

秋一首并經歎

天地之方時後神大倫平高尊駿河有布土能高原  
嶺守天雇振放身者度月之漢毛急ハヤシ月乃  
竟毛不見白雲安併去波伐加利ハカリ情自久曾雪者

新古

五

落家留。諸告言迷特往不盡高嶺者。

逐歎

田兒之浦往行出而見者真白衣不盡

北高嶺余雪沒麥家留

右乃ちくせしもとすぞうのあひて  
寄きありそよまじりと白ゆかく高嶺け  
とあつて出で野在今よへらむらじ奇を  
里の浦のそひかにとまわく全と映らむ  
ナウて心刻とよくな富さりち原の毛とえ  
ナウとよく少味と下酒をあ爾もとす  
とよる根の實めすりと刻ニシキ年以て  
毛里うりとソヒルトアムを奇異すにい  
立の毛と在今や、かあやくま命りとづア

奇妙多奇りねば多事すけんとソラ候  
アウ一色忘却せり隠と里とへ

五猿丸主古傳云・官姓時代不詳之

或系國云用明天皇聖德大父尊太元王

前王武祖云天武乃也事道キウ前送鏡と号ときは院  
不寄ノ聖達ノ事ノ御孫ノ前ノと猿丸主ノ事ノ也  
号ノ一ノ送ノ遺ノ法師ノとノうら前ノはそ  
多ノ事ノもノ事ノ下ノ此ノ圓滿師ノ事ノ也  
流ノ事ノもノ事ノ是ノ通達事ノ流罪ノ事ノ也

注歩ノ事ノ也ノ事ノ也

鴨長明方丈記

逐國四丁一號丸主四號

卷之二

わくとおもてまけ事務のよきと秋がむ  
は寄、奥山とつうを文字附シトの例を

くと筆あらうて奥山のくらすをひら  
ほと筆すとそとをもとつて是をあやりしも  
うちと奥山すりらうてもふとせに又筆  
すあらもひりえ行後と多はそりかくもとを  
たと又筆すううてもふとせに筆もとと  
まゆと筆す秋の行り叶ひきととと  
麻りしらんく跡はりれいととと  
おはれは林毛間の林ととととと  
えれは篠すらとととととととと  
えれは篠すらとととととととと  
えれは篠すらとととととととと

六中納言麻持 天平元年生 安原旅

六伴宿称安磨

大納言  
姓

大伴宿称旅

大納言  
姓

大伴宿称都

大納言  
姓

大伴宿称都

大納言  
姓

一說天智天皇大伴皇子

天智天皇  
姓

都陽年

天智天皇  
姓

都陽年

天智天皇  
姓

都陽年

天智天皇  
姓

私黒主弟内夜須良磨、安磨と同不可易之  
經三位中納言春寔奉本寔至右大年左寔少  
年と改めり又征夷大將軍レ仰と

延暦甲午年八月度在達奥國薨其體未葬九管

不伴連行良木射穀中納言達三位兼行春寔大

丈陪與翁按察使鎮守府將軍不伴宿称都持

都持

は暮の様の事でタクシード、鳥居成橋が  
内事にひきこもる様は見えぬ事で奇の事であつて  
と云ふつり也。宿持、周夜ト延々月をもて  
くしてましむしひし吟しかばと翁の天國  
うして詠歌トアラモロホトアラヒ精復此を  
えれども喜んで満たし身のやうすらかく義  
津尾(秋江)をすく月をかゝる事せむ也。轟  
谷(かくこえ)の深夜をとめとくはまくすす  
感性(かんじやう)をひき又翁の様の様の事  
ひきすがすがしきと又あらりとも  
まゆをすくすくとすくすくとあらはすにす  
の間(ま)をすくすくとすくすくとあらはすにす  
かくじにて御壁せし末代の人物  
也。中あつてゆゑ也。  
**石和物語**云泉(いわゆ)ひちあひゆの木と  
重り(うれ)外て酒(さけ)をくみ多て疾  
りくよ御行(ごゆき)てゆけあひゆの木と  
てゆけあひゆの木行(ごゆき)てゆけあひゆの木  
ゆけあひゆの木行(ごゆき)てゆけあひゆの木  
ゆけあひゆの木行(ごゆき)てゆけあひゆの木  
ゆけあひゆの木行(ごゆき)てゆけあひゆの木  
ゆけあひゆの木行(ごゆき)てゆけあひゆの木

行賄乞公卿之家持乃私稿。日本也以之

七 安信仲 唐

考元皇帝子不庚命後

金搆丸

左臣始  
一釋唐

又云太祖高皇帝年男之私云尚義兵以不害系圖  
亦不戰之。又從王侯朝銜太祖高皇帝平宋云鄉補任不  
見害以不妄信用。

尤正皇帝靈龜二年八月廿日為皇子生。復唐朝賜  
姓趙氏。又洗心天皇御室左率。半相馬常

德重于唐朝遣于時歸朝。此義不害

尤正皇帝靈龜二年四月庚午天皇御室煙一百年。  
及年如何。又或改云仲。○達唐使桓武御時。

是延不害 江談第云仲人譖歌本。靈龜

二年為遠唐使仲。仲九渡唐之後不歸朝於

漢家。拂上餓死。○仲人後渡唐之時。見鬼殺。○仲

言備大臣言該相教。唐主。仲。仲丸。不歸朝人也。

讀序。雖不可有禁。志尚不快。欣如仲。

雲慕。或記曰仲。唐者。榮惠星。力能也。降和閏輔。王道到。

異國。天文陰陽。異朝人。抑惡之。令祭周而遂殺。仍為

靈鬼。○仲人吉。備丸。濟唐之時。見鬼。是異形。教。○仲天

文曆術。卒。計儒盡。今。東朝。○仍仲。唐。孫。萬。

少。猶達。天文傳。其葉。○濟陽道中。安信氏。八

李。通。卒。光明。申。先祖也。

工原ありしけをさすれども此日  
は寄と昔すまうともうてしわく  
小舟のうら舟あくも年とてえがす  
まとてそうちけをわ因り又ばひうち  
すちけようひくまておひとわうち  
けよりとよかへ海てとりのまくひま  
くわじくちうよきと月のひとめ  
しゆくわおきとみくとすくごんぢうけ  
えす。

作意仲  
侍のうく在廣てゆ約ハ付唐令餘  
名約也モト時奉也び今エ義重氏御  
未熟未熟慈皇乃分承や村根安務公く爲爲元

シミ横く殺んキルて之に使シテ連もすす屋  
争也あちけをもとと仲丸美文院とね  
がれ也空きと云承とキ裏入て史と正  
廣のナカと云ふより大野大御三室人  
門とひ行ひ時吉日明作乃志税て二  
りとつらゆきとゆづけ相り乃家也公院  
士振作ど云義文と振下也と云家長周書  
貴之志日行あはせかづとすくけをさ  
しもさうえを由流ほ叶てもを振往月と  
ゆきとさう外ととくとくととくとくとくとく

書食の事やくそく月の下うひひつ鶴的と  
ともじよすむほんとく年暮大月すれ  
三重あゆりつゝ月りつうくしゆくとく  
よしのるあよしりくとくとくとくとくとく  
よしのるえく見ゆくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

八 喜撰法師 在今序撰喜 羅東泉

奉稿イヲ余良子イヲ 本刊イヲ 部卿イヲ右席イヲ 朝巨息イヲ

共以非也余固小無所見イ 誓山城廻イ 刻郡金

至不イ不知イ

淳淳隱俗遺跡イ 室

アリ

作和歌イ式イ

称夜曉冲流イ 東卜イ 有舞

武作同人イ一

執本泉同人イ 文別久

鴨長明無若故イ 云却イ

宣室イ 奥イ 餘イ 了イ

半イ 之イ 淳イ 乃イ 疾イ 住イ 乃イ 疾イ 有イ 痘イ

石鑿イ 之イ 小イ 有イ 之イ とイ あイ てイ 久イ 久イ

秋イ 之イ 邪イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ

東イ 之イ 之イ

之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ

之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ

之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ

之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ

之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ

之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ 之イ

花乃多子也

上野子也

おはな

方東子也

方東子也

方東子也

方東子也

方東子也

九 小野小町

翁郡司小野實女常隆

常隆

方東子也

方東子也

前後古今にこそ才のうち、故集を取て之を  
は等に懷裏の挽歌りをもてて其のまゝに歌  
身とすさんとせひいをもあしてまことに  
ノ音にうちすまへ。アラ花くみの花をまへ  
アラ花うちすらかと寄てまゝ裏の挽歌を  
歌ふあくまくの花のとくべとく歌  
オモリムシテアメとせひいをく歌  
キモセアラ花すこしの花はるかの歌  
とくとくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく  
あ多き意じ可せ事あきよ耳上アシタヒト年  
禁りともりお歌はる親王三百首上

白雲の歌に歌ふから日月の身

不思議初をせんと萬まきと精金作り出  
未だうだうだうだ。 乞秀遠アシヒツヨウと何事  
在琴序アシキシと小鹿の歌をつめ金をとめ娘の歌  
めくねくやうして山よかとつめ金をとめ娘の歌  
さくやうは序せんとまつてあめ金をとめ娘の歌  
ほよよかの歌をかわすとあめ金をとめ娘の歌  
さすがそれの歌をかわすとあめ金をとめ娘の歌  
原すすらとまつて

+ 蟬丸

會坂蟬丸

仁明時道今常利繫聲

三光流節流世人有者下多ハ聲。後後は其  
聲無聲の用也。往來あつてまくと音自

思ふ事多々と有りては湯の身湯  
雖も後五湯劫現頗る衆生余也

又延喜ノ皇帝ノ下も不於古集よりの  
奇才才之尊帝十三歲して即位すと  
其の以ニ威よくあらずもしてかく下  
鴨長明方丈院公栗淳の原と云ひ<sup>セシカ</sup>釋教翁  
乃近寺主<sup>ヒミツ</sup>又同<sup>ヒミツ</sup>家<sup>ヒミツ</sup>お坂の開林  
トヨハ前元源也の事也此とくわづと  
うこ寺<sup>ヒミツ</sup>とゆきにすまかす下今ともあつた  
ゆき<sup>ヒミツ</sup>音津<sup>ヒミツ</sup>のゆほして和琴  
の良琴<sup>ヒミツ</sup>の良<sup>ヒミツ</sup>りもとてうよ<sup>ヒミツ</sup>を  
音の半<sup>ヒミツ</sup>て西教<sup>ヒミツ</sup>し<sup>ヒミツ</sup>がく<sup>ヒミツ</sup>と  
ゆき<sup>ヒミツ</sup>或拟<sup>ヒミツ</sup>云<sup>ヒミツ</sup>アリハ古物<sup>ヒミツ</sup>と金坂の翁  
名<sup>ヒミツ</sup>信也<sup>ヒミツ</sup>或<sup>ヒミツ</sup>云<sup>ヒミツ</sup>信也<sup>ヒミツ</sup>圓<sup>ヒミツ</sup>源<sup>ヒミツ</sup>一<sup>ヒミツ</sup>鶴<sup>ヒミツ</sup>の<sup>ヒミツ</sup>後<sup>ヒミツ</sup>之<sup>ヒミツ</sup>  
特<sup>ヒミツ</sup>雅<sup>ヒミツ</sup>極<sup>ヒミツ</sup>不<sup>ヒミツ</sup>通<sup>ヒミツ</sup>身<sup>ヒミツ</sup>琵<sup>ヒミツ</sup>琶<sup>ヒミツ</sup>只<sup>ヒミツ</sup>以<sup>ヒミツ</sup>譜<sup>ヒミツ</sup>請<sup>ヒミツ</sup>歸<sup>ヒミツ</sup>之<sup>ヒミツ</sup>同伴<sup>ヒミツ</sup>  
曲<sup>ヒミツ</sup>近<sup>ヒミツ</sup>代<sup>ヒミツ</sup>有<sup>ヒミツ</sup>不<sup>ヒミツ</sup>被<sup>ヒミツ</sup>合<sup>ヒミツ</sup>云<sup>ヒミツ</sup>懐<sup>ヒミツ</sup>不<sup>ヒミツ</sup>首<sup>ヒミツ</sup>懷<sup>ヒミツ</sup>但<sup>ヒミツ</sup>年<sup>ヒミツ</sup>歲<sup>ヒミツ</sup>ト<sup>ヒミツ</sup>多<sup>ヒミツ</sup>  
又<sup>ヒミツ</sup>琵<sup>ヒミツ</sup>琶<sup>ヒミツ</sup>ト<sup>ヒミツ</sup>多<sup>ヒミツ</sup>舞<sup>ヒミツ</sup>和<sup>ヒミツ</sup>琴<sup>ヒミツ</sup>ト<sup>ヒミツ</sup>彈<sup>ヒミツ</sup>ト<sup>ヒミツ</sup>多<sup>ヒミツ</sup>傳<sup>ヒミツ</sup>タリ  
名<sup>ヒミツ</sup>後<sup>ヒミツ</sup>傳<sup>ヒミツ</sup>力<sup>ヒミツ</sup>琴<sup>ヒミツ</sup>モ<sup>ヒミツ</sup>僻<sup>ヒミツ</sup>半<sup>ヒミツ</sup>ノ<sup>ヒミツ</sup>又<sup>ヒミツ</sup>流<sup>ヒミツ</sup>泉<sup>ヒミツ</sup>歌<sup>ヒミツ</sup>本<sup>ヒミツ</sup>曲<sup>ヒミツ</sup>六<sup>ヒミツ</sup>世<sup>ヒミツ</sup>傳<sup>ヒミツ</sup>  
先<sup>ヒミツ</sup>也<sup>ヒミツ</sup>必<sup>ヒミツ</sup>何<sup>ヒミツ</sup>或<sup>ヒミツ</sup>童<sup>ヒミツ</sup>或<sup>ヒミツ</sup>師<sup>ヒミツ</sup>未<sup>ヒミツ</sup>ト<sup>ヒミツ</sup>少<sup>ヒミツ</sup>義<sup>ヒミツ</sup>之<sup>ヒミツ</sup>遍<sup>ヒミツ</sup>  
後<sup>ヒミツ</sup>傳<sup>ヒミツ</sup>未<sup>ヒミツ</sup>也<sup>ヒミツ</sup>又<sup>ヒミツ</sup>劍<sup>ヒミツ</sup>未<sup>ヒミツ</sup>也<sup>ヒミツ</sup>又<sup>ヒミツ</sup>水<sup>ヒミツ</sup>お坂<sup>ヒミツ</sup>の園<sup>ヒミツ</sup>唐<sup>ヒミツ</sup>  
未<sup>ヒミツ</sup>也<sup>ヒミツ</sup>未<sup>ヒミツ</sup>也<sup>ヒミツ</sup>又<sup>ヒミツ</sup>劍<sup>ヒミツ</sup>未<sup>ヒミツ</sup>也<sup>ヒミツ</sup>又<sup>ヒミツ</sup>水<sup>ヒミツ</sup>お坂<sup>ヒミツ</sup>の園<sup>ヒミツ</sup>唐<sup>ヒミツ</sup>  
旅<sup>ヒミツ</sup>若<sup>ヒミツ</sup>の聲<sup>ヒミツ</sup>未<sup>ヒミツ</sup>也<sup>ヒミツ</sup>未<sup>ヒミツ</sup>也<sup>ヒミツ</sup>ト<sup>ヒミツ</sup>多<sup>ヒミツ</sup>也<sup>ヒミツ</sup>未<sup>ヒミツ</sup>也<sup>ヒミツ</sup>未<sup>ヒミツ</sup>也<sup>ヒミツ</sup>と<sup>ヒミツ</sup>

心仕事遷じとく流物の少くせんく聞子すわ

人へくへく内里く方法一ゆくゆくと満と迷ふ

高野作  
三事六道輪迴の事何我何人誰親誰隣とづ

和樹寶錦云、自史作種、素感種、卓、卓相種

生歎石、黒牛惠、廢、廢無智、均役、幾罕、之方弱故以喻之

丈生罪、君先、余人忽然猶生之、輪物六趣、充去无去。

沉淪二途、生死、文母不若生之重、生死似、亦

不慎死之、明去、頃、過去、冥、不見、其有陽來、

漫、不尋其尾、三辰、數、預、晴同、狗眼、五、獄、牽、

迷、似、羊、目、晝、日、夕、數、夜、食、之、獄、也、遂、逃、

樂、左利、王坑。

又玄墨青者、不識、育生、生、生、精、生、元、死、次、天、宣、死、陰。

十一、參獻皇

紫野、參、獻、左、矣、暗、許、相、不、ト

敏達天皇、春日皇子、妹子、允野、承覽

小薪臣、正、宿、御、言、津、薪、送、下

冬守、宣、保、衛、阿、波、守

昌弘、通風、能書、三、薪、宣、跡

巴翁、被軍旱、紀、采、立、正、宣、歲、火

官、文章生、彈、正、忠、大、内、託、藏、金、孽、ナ、血、立、寧

か、東、宮、皇子、彈、正、引、游、義、作、外、山、徑、氣

和、元、年、月、廿、九、日、遣、唐、副、使、と、奉、さ、て、度、僕、乃、

舶、沿、水、游、海、ト、重、病、上、依、く、進、教、ど、半、叶、

半、十二、月、廿、九、日、到、て、昌、皇、内、し、繪、旨、合、て、尔、境、レ、便、

伏見も難し病と稱く、國令と連うづら津  
志津に係て死事罪と降して遠汎は度と長  
とて海は國配流シテ也。即ちヤニの船  
ありもひと左使下奉りて改めや二船を一  
かく大便をもむとヤ一の船とカニト引て  
副使督シテモサムヤクシテ、又病と稱く  
トモハ運シテ失慎シテモナリて、而過程セイタツヨウとシ物と  
作りく遣唐シタマタノ役シテ、もと内シテ御傳シテと  
おも治歴シテ上天皇覽シテ、後シテ大内シテ爲シテ御傳シテ  
は罪下シテ、一統承和六年七月日陽波國配  
流シテ、至承和七年二月一日シテ、小く六月シテ  
承和八年四月十九日シテの位シテす。承和  
九年四月十一日シテ參織シテ、同月廿三日シテ、  
子シテ仁宗五年十二月十九日シテ、位シテ正卿シテ卒シテ。カ  
又之流シテ御中年三十未シテの異シテうつシテ  
一工無恩シテ善シテ、そぞそんシテ不シテ別シテ心シテのよ  
ゆシテ、ナシテ、當時議論シテ、百事シテ、  
議論シテ、くらめんシテ急シテ、じ兵シテと重シテ、  
として、もとシテ二の面シテ、無シテいふ。  
又一、遣唐使シテ、うまそも海シテ時、今船シテ、全船シテの  
ありもひと係シテ、之年シテ也。

又一

遣唐使シテ、小大路シテ、元王院シテ、院シテ

今御書しゆにのくあみゆきはせはす  
ておれりておひくすうはううトありゆ  
おひこのあくひをめくらふまやおま  
く小瀬乃様はせしとおまくらふま  
えまへておれくわほりよしとおまく  
くいはくまくはうけとおまくのほく  
おこは圓のくひとおまくをおまく  
おゆかはれがくちとおまくとおまくのゆく  
おまくをくすりとおまくとおまくのゆく  
おまくをくすりとおまくとおまくのゆく  
おまくをくすりとおまくとおまくのゆく  
おまくをくすりとおまくとおまくのゆく  
おまくをくすりとおまくとおまくのゆく

成文

平成天皇  
五代

仁明天皇  
五代

清和天皇  
五代

允恭天皇  
五代

孝元天皇  
五代

光孝天皇  
五代

裕仁天皇  
五代

十一僧山遍昭

俗名良基、宗貞、号慈信正

平成

五代

平城天皇

五代

仁明天皇

五代

仁明天皇

五代

仁明天皇

五代

仁明天皇

二明大皇御事日三达

吉井三毛櫻七

延慶年賜良基朝臣姓法眼権僧正元慶寺座主禪院

前之奉軍神天台觀密室師學

上神

深栄の身の事の多くおもへるゝがそれほど  
あつたくと謹聞するべく思ふのである  
角をとてのひのひせりてうちうて  
うちうてのひのひせりてうちうてあつた

平野の事かくもひづれの事とて

みよし元の事かくもひづれの事とて

夏

平野の事かくもひづれの事とて

古今の事かくもひづれの事とて

のともかくもひづれの事とて

東北の事かくもひづれの事とて

建仁

三十六内記  
卷之三

十三

陽成院

詳貞明 在位八年 清和天皇

平五代

天壽三年九月廿九日落錦入道

神皇之靈勝慶寺之御靈也

文德天皇

平五代

清和天皇

平五代

陽成院

仲母皇后之靈勝慶寺之御靈也

義和天皇

平五代

天壽三年九月廿九日落錦入道

貞觀八年十月廿四日葬訖同上年二月一日昌孝天子ニテ  
同八年二月廿日讓位モカ 天慶六年九月廿九日崩 平五代  
又名陽成院と云院と有モ位と志を庶ては院

ト有リモ

信籍

けものゝ處より身をひき川底を傍りて廻るが如  
くあり處からかうへばうるあり病はども其  
川は常清らぬ事無じ奇の心えりゆせぐ  
うりまのあきらめくらべて水のうとうたふりて  
く御とおもよみてこそせび川の事極ハへれ  
はとそりはとくねりは病のよとくうと内  
とも人をと一清つかきて未だくすがせて序  
やまの事とくまくに事もえりわと事  
もとまつて下り連とすり西と下り連とすり事の  
今りと往てはじわくとすりとすりと

十五 河原天皇

平五代

仁明天皇

平五代

仁明天皇

平五代

仁明天皇

平五代

源融

河原天皇

仁明天皇

仁明天皇

仁明天皇

弘仁三年壬辰生於天皇之御殿之山房  
義和天皇十四月廿七日正四位下天限日貞觀八年

八月廿日位佐佐大臣仁和二年十月十七日位朝臣

同五年平成草車

寛享二年奉政末元治風年八月

九月薨平成同廿八日賜正一位

古今法奥ハシマツのものもらどり誰ハシマツをさうか御ハシマツが  
左ノ御ハシマツうちのらハシマツ奇ハシマツの心ハシマツ上ハシマツ方ハシマツへくりと  
もしての序ハシマツへ也ハシマツの心ハシマツ上ハシマツ方ハシマツへくりと  
君ハシマツアモトムハシマツトツハシマツ心ハシマツ明ハシマツ左ハシマツニ  
すりとハシマツましれハシマツ以ハシマツトハシマツひづり傳ハシマツ鑑  
みハシマツうちハシマツをハシマツとハシマツ

法奥ハシマツのものもらどりハシマツの奥ハシマツ列ハシマツ儀ハシマツ那ハシマツ事ハシマツ  
と致ハシマツよつけハシマツどりと致ハシマツとハシマツおきハシマツまちせハシマツおハシマツ  
御ハシマツといさんハシマツの序ハシマツ

平成十五

光孝天皇

平成詳時康仁明在位三年

平成文德天皇昌希

昌景昌惠昌藤澤昌

宗康親王賜皇孫賜藤澤昌

賜太政大臣總繼女

平成十六

孝明天皇

名家康親王昌

天長七年度成降詔承和二年正月鑿器同十二年  
二月元服同十二年正月常陸守嘉義拜昇  
九月 中務卿

仁壽元十二十三品正三貞觀鑿六平赤縣守同

十二年正月元服同十二年十月卒元慶正七品

大富同八年正月大寧師同正月四度禪昌

仁和二年正月讓位而崩昌八月薨小松後

刻ちに和らかひをもつてやうすくうれ  
すまひの葉とあらに和の清風則芳草  
也善草とよしとせうゆく事とすとすと  
葉露と服とし多く人万病邪氣とのと  
との七種の葉善氣と信とせばの事と  
用うち厚い清と善葉上下の表と清露は  
てのあじと半三抄ての位と清とあ  
文被ふうと薦と清と清和と清とすと  
かく湯底の里と達行すての車の表と  
かく即行と清と清と清と下の薦  
玉心被ふきと善と善と善と善と善と  
刻てのと小もからりと下がる葉  
とすまひの葉と善と善と善と善と善と  
善と善と善と善と善と善と善と善と  
じゆと善と銀雞と善と善と善と善と  
あらわら方と善と善と善と善と善と  
めとそり上二下三と善と善と善と善と  
と善と善と善と善と善と善と善と善と  
位と善と善と善と善と善と善と善と  
少くの葉と善と善と善と善と善と善と  
入行て

~~新葉~~

~~かの~~

十六 中納言行平

在原氏号在納言

桓氏天皇

平城天皇

阿保親王

在室年

在室年

在室年

伊達内親王

在室年

在室年

在室年

在室年

古今離別水

古今

離別水

古今やむらもとより臣属國守ゆかりしは

古今のわくとちよ不しなまくといすと  
そく又北して國へてはりとくとく心を

えあくとくらむるゆくとくとく不じ  
すくらめきくとくらむるゆくとくとく不じ  
絆とくひすくとくまきてとくとくれくとく  
別あらうとくとくとくとくとくとくとくとく

絆の別あらうとくとくとくとくとくとくとく  
はの本因幡とくとくとくとくとくとくとくとく

古今

又院流乃猶御ふとあらうてとくとくとくとく

かくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

かくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

かくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

かくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

かくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

かくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

古今離別水古今離別水古今離別水古今離別水

とくはまくわ

十七 在厚葉平朝臣

号在五十將、系國行平處子  
實行平錦

戯人蔵アラシ、車將右馬以アマエ、徑置上義爲羅舉アラシ

元慶二年正月廿八日卒

千手羅代チムシロ、代タケ、人鷄ヒヅチ、川カワ、水ミズ、火ヒ、

羽ヒ、矢ヤ、毛モ、后アフタ、の、ま、ま、め、も、も、ん、め、

屏カツラ、向カタ、引ハサウ、門ドア、り、ち、す、き、て、こ、と、う、ま、ま、

と、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、



御殿

ひ御殿へとまくよつて御殿へとまくよつて

えをもととととととととととととととと

詮とたれとあらわしとととととととととと

はちとととととととととととととととと

ととととととととととととととととと

とととととととととととととととと

後撰

傳

陽成院元良 天慶ニセキニ薨 五十岁

二千 元良親王

陽成第一子也。三歲薨。

母主殿不善女

儀の事は今にアリキと申す  
めりまつ勝の事は伏見を起とる因  
はもと廻らてからと申すと又云ふ  
事はおもとあつてもあれが因であります  
おもとからみ出でてくと那波の源、阪浦を  
うちからと遡り水路は源と申すとあ  
ともせじす遠き行のうとと奇と申すと  
をちも行かぬと云ふと奇と申すと  
ゆきとくと今度と下と云ふと又取向をさ  
くわざとおととんびとさひひむぢと  
さ

一 素性法師

俗名利家因見通下

めりこ

古傳云信若儀時々又多利官府時臣

金をうりひづりと肩の上乗舟と申すと  
あら月夜うりおとねど船の上乗と

或折清松御時敷ア<sup>ラ</sup>寛平御時佐律師富  
金をうりひづりと肩の上乗舟と申すと船の上  
あら月夜うりおとねど船の上乗と申すと  
舟の上乗と申すと申すと申すと申すと申すと  
也近焉而流りうりおとねど船の上乗と申すと  
公衣の上乗と申すと申すと申すと申すと申すと  
舟の上乗と申すと申すと申すと申すと申すと

申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと  
申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと  
申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと  
申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと

舊本の事

舊本の事

用ふくらひて、悲壯といひ後事也。食  
事後乃用うち事あつたと則り貴重  
也。文乃あり

セ二

文屋康考

先祖寛達<sub>子孫</sub>、  
<sub>宗子</sub>。

東林下卷

古傳云陽關閉時人

佐多河原武田朝

吹い株のま木をさすとしの用ありとす  
も貞の名を此守合ひありを今ノ序  
刻てミオナシヒツラ院の多々ある本  
本をさすと本へよみ字とくに核字のみ  
ひ小カツリに内と外と扇字ありて院う  
高流は不用くとあくに内と外と宣應證の字  
せけりとさひと虚名を集とへ野乃草木なり  
音の音と材と可とをきくが爲めに傳ひて聖  
が言ふととやうと今林下の奉入ます  
とよもとさひと秋のま木と書く直ひて  
四と音於音をと風と力と引のとよむ吹うは  
とよむ吹うは風と吹音ととよむと風のやま  
とよむと風の風とあうととよむと風の  
とよむと風をとよむととよむと風の  
とよむと風の風とあうととよむと風の  
とよむと風の風とあうととよむと風の  
とよむと風の風とあうととよむと風の

セ二 大注子室

伊集院

五位下

整之

藏元

平城天皇 阿保親王 大江貴人

送位上書

古事記

在原行平  
在原書奉

千里

富金男

月をまつてはのぞむとすかうる縁より御ひの御妹と  
日湯の氣をましす心の極もと月の氣  
すらぬまじかしりよやまとあわせしもと  
さむるにゆきのとすかうるとすらゆじと  
限をくとすかうるとすれしとすれしと  
ばるト同く下向の林天下万民の愁ゆくやう  
りそれ一牙の秋しやがゆうとくとて秋がひの  
秋よめねづら

詠月をいのりのや月とうすめくわくの月の  
不そこの月をうてくわくとけんの老をも  
夢の子樓中痛月夜秋來只爲一人長  
大唐西時心惣若龍中勝利是秋天

志 菅家

少梵天神也 在大臣正三位 在大將膳政人上正三位

天穗日命

天照大神是ニミ 無云臣師連祖

佐德不重詩改賜土師連等

佐世孫野見布祢方住天皇御宇禰上師連等

世孫者

佐世改賜土師連等

佐世孫天皇御宇

佐世改賜土師連等

守庭

佐人

清公

呈

菅家

河成守後位下  
佐人侍讀  
佐人侍讀  
佐人侍讀  
佐人侍讀  
佐人侍讀

助辭由長官天平元賜菅原姓  
大平將文禮清侍讀

かくひもくもそりあふともかくすかん錦袖のちの  
刻す朱雀院のすこしきりもくすこしを  
ふくしてふくとめうそくは寛平の筆をひぐひ  
も族の字と今傳すありとわがくとてたまひ

度の字よりり。作事可とく。松と鳥の枝  
少く叶。常角。と。所を。まよ。家。津。  
まよ。秋。満。山。氣。滿。う。る。葉。ふ。  
まよ。秋。満。か。れ。叶。是。行。わ。れ。あ。と。  
**此也** 平。ゆ。ひ。は。い。あ。

**祇役退風前湘半春也**

熊彌童

水生虎執布仇新

只見公程不覗春

應被百花撩乱笑

染來天地一閒人

はゆ。浦。徒。す。い。不。和。と。作。の。詩。

**笠 三宿平官**

定方内大臣 高藤公三男

母宮内大臣 高藤公三女

郡主女

勸懲寺家祖 奉文 亮中將

中納言

刑部奉

正五位下

刑部守

原成物下者

詔

用院大夫又嗣高

美

良

門

利基

昌輔

雅正

為時

紫雲郎

**高藤**

高

藤

泉大内

、

名の字。お汝。乃。子。は。今。之。が。と。而。聞。

刻。サ。セ。ア。リ。ト。け。う。タ。シ。テ。シ。テ。サ。セ。ア。リ。ト。而。之。

ハ。首。仰。の。身。と。さ。ぬ。う。れ。す。の。と。ソ。う。け。た。初。

も。の。寝。の。や。と。ま。す。小。腹。と。そ。も。ひ。か。り。う。火。

く。と。ま。と。あ。と。ま。く。と。ま。と。あ。と。ま。と。そ。を。あ。お。ま。

一。そ。う。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

後に是ひとすりておもひてゐる

行はれてはゆる

共貞信公李平 桂遺行

本院輔大政大臣

昭宣孟男

内裏大臣李平 桂宣公

本院輔大政大臣

桂宣孟男

時平

仲平

義平

忠平

忠政大臣

師輔

九条家相

小倉公ひらひらと書じてひかゆまめん

御子亭子院大臣川口筆あての書をあへて

あやうとわざと書せば、筆あての書を申ては可

い

よし

大和の信公亨子の筆あての書をわざと

井川公はまつて書くに、御筆小倉公と

いがりゆうと筆あての書をわざと書くに、

よしと興あふて筆あての書を書くに、

まんまと行ひて、いがりゆうと筆あての書を

あくと書くに、筆あての書を書くに、

いと興あふて筆あての書を書くに、

もと書くに、筆あての書を書くに、

いと興あふて筆あての書を書くに、

もと書くに、筆あての書を書くに、

章の事よりては不思議なる事也  
不思議ありを凡ての所へ傳へゆきて  
いりたる

**大中納言義浦**

大中將利奉男、義學納言  
右衛門侍従三位

**至爾園三葉菴**

正一位

の原よりしてさうと泉川のまへてあひのん  
野原へむらをとめ寺の名をす不考の事と又  
未をもれど其の度よりてかくと泉の源を考定  
し泉川の事と、いふ事と見ゆるがゆくとて  
くもすとれずひゆまと多くひく致せり  
てつゝと又一向あひゆる事なしと年月を

ちよひあひて、いはすかひふくの  
うそを然ゆる事と云ふ事のうきの  
あらわすとて、又泉川の浦と云ふる

をのあひて、今の原のうきの浦と  
いふ事とて、河水のうきの浦と云ふ事とて  
むとて、泉川の浦と云ひゆく事と  
て、一考めりてトしたト五音通じる。

**大源宗子朝臣**

正三位

正三位

**光孝天皇是忠親王宗子**

賀丘行作者

**玉光院御流**

此帝皇系園不載えり

**或說光孝天皇御孫**

教正子

敬子

古今小史卷之四  
有事於外多爲之憂心而嘗時以之爲  
事也。林子曰：「吾聞之，人情有所好惡，則  
小之爲事，乃其所以爲之也。」故曰：「不善者  
無所好也，善者無所惡也。」然則人之所好  
者，善也；人之所惡者，不善也。故曰：「人  
善林子曰：「吾聞之，人情有所好惡，則  
小之爲事，乃其所以爲之也。」故曰：「不善者  
無所好也，善者無所惡也。」然則人之所好  
者，善也；人之所惡者，不善也。故曰：「人  
好之者，必有其好也；惡之者，必有其惡也。  
」

**充允河內鄭恒**

傳先祖見甲斐村日  
御所預

延喜七年正月十二日任丹門樞督

後佐佐藤義

**祓注行氏孫浪打**

姓又甲斐少司

當也。而此名也。自是也。白鳥紀

而有之者，必有其有也；無之者，必有其無也。  
故曰：「人情有所好惡，則小之爲事，乃其所以爲之也。」故曰：「不善者無所好也，善者無所惡也。」然則人之所好者，善也；人之所惡者，不善也。故曰：「人好之者，必有其好也；惡之者，必有其惡也。」

李水

而有之者，必有其有也；無之者，必有其無也。  
故曰：「人情有所好惡，則小之爲事，乃其所以爲之也。」故曰：「不善者無所好也，善者無所惡也。」然則人之所好者，善也；人之所惡者，不善也。故曰：「人好之者，必有其好也；惡之者，必有其惡也。」

壬生忠岑

右衛府幸元本衛泉翁隨身

右衛府府生 御屬所官外膳部 桂津舟  
有明の下れくからくから腰つりにりのう  
名譽のきこよとをすすむはれはれ  
百物あらゆく直代ふそとての後承天皇御の事  
と集へらゆくあれ、不毛の事とあり坡居へ  
毛の事とすむ事とすむ事と不毛の事とあり  
とくえぞり紙にいじうち今急にあひすの  
あら不毛の事とすむ事と、一肩をあら爲  
合せ半身の事と、郊主と行裏とすむの事  
と毛の事と不毛の事とすむ事と、  
公美御て、もと毛はまくして、もと毛とすむ  
せんくうち、もと毛とすむの内へあらわしす  
とあらうて、もと毛とすむの内へあらわしす  
くも夜の焼つらうとすむとすむとすむと  
と燒けとすむとすむとすむとすむとすむと  
とくふれがれとすむとすむとすむとすむと  
家屋の更に火のうつまとすむとすむとすむと  
着て、もと毛とすむとすむとすむとすむと  
とちうと書かくをとくじあら焼、にりのと  
かとくと書かくをとくじあら焼、にりのと

かくとらす。金葉御代乃時代可。三月  
ぬづかはう。うきふす。本とせうう時代  
一月。ほきてうきわく。くく。かのちと  
うかどへどり。

廿一 板上是則

古今記後五位下 賀外御書所預

板上是則

望城

後漢書卷之四

冬小

かくとらす。月とす。トうの里とす。向  
朝ちやものふくゆとす。意あけとす  
うやうとす。もれやを夜の内すと朝  
朗朗朗用明且とす。めりゆけとす。里とす  
てごとく多きまゆ月をよろとす。かく新月  
うす近と見て。此とこそ月の月とて  
てりの里とす。白帝とす。めりとす。野  
野とす。多き。あそびて。月とす。とくに多  
月とす。うとく。うとく。うとく。うとく。原氏  
あそび。うとく。めりとす。うとく。うとく。  
石室のあそび。逍遙流のむ。

廿二 春道列樹、後五位下 雅本以新石室書

文章傳主 正六位上 壱岐守

冬

萬葉抄  
万葉抄よりあり。多摩川の事としまして是川  
の字湯。一こそ本の事かとてせんとまつた  
事と云ふ。かくして是事と聞かざるは御心也  
風呂を以て之を洗ふ。所が是事かひゆくか  
御心流せしをうりすと見て风呂を  
もあらそひて是事と見えどひかして是事とあら  
そくもあらそくあらむ事無事とてうらやまをき  
もあらそく風呂を。一とくとひまも外  
おもふのとくつら瀬ひまの事とてあらひまも外  
そくもあらそくうらと見ゆる事無事とて是事  
八百川に事の事とくつら伊勢物語

物やうもあらそくあらすてあらひ瀬ひまの事  
えも自問自答の事。事の事とてトドの瀬ひま  
ト内ひまとくつら瀬ひまとひかくねひま  
又方とくつら瀬ひまとあり

千葉振林りいと小ふすすめとくちの事  
内藤易  
秋風うちとねくらはるかとれあとくねひま  
乞不憚ひひり

新古今集  
新古今集よりあり。多摩川の事としまして是川  
の事と云ふ。かくして是事と聞かざるは御心也

外とす事の事とてあらそくあらすてあらひ瀬ひま  
えも自問自答の事とてあらそくあらすてあらひ瀬ひま

すと又すまうもあうを／＼一すらとし

十三 紀友則

久留記 紀有友と或妻庵庵婦米立

政有明

孝元天皇 庚大忌懷奉 忍食十六代之孫 振衣

中雪言

石兵衛等

歲人

義和氏

徑五上赤手内威物

船書

後卷五卷内

美書

名席

赤側之

宮少君等

徑五上赤手内威物

船書

後卷五卷内

美書

有常

赤則

宗庭

行廣

東作

美均

久留乃えれと久紀多の日事等のあくゑりとし  
御子を梯りたのうとまうとあり心を角のものうと  
ニ篤景そりれりゆりとあくとあくへ行くとまう事  
そぞこ一年十二月の申と正月の承月して坐す  
對吉よまく表の、そうち多め教子と死」  
恨とひけむちと、まて行きてとまうと  
きくみじうじゆと、まうとまうとまうと  
いふと不審うとて、る嘆びがごのふうと  
人のめいしろまくと、も多くと、言ふれどこれ  
とも元のひとみうちゆくと、裏の院長等  
よ約まくと、かくしとす能むとまうとされ  
りとやかくめうととくと、今まうと月のえのをま  
ふまくと、ぬりと、とせむと、とせむとされ  
くと

世四 藤原興風

或說下總瑞守 正六位上治身女

相模守

或說下總瑞守 正六位上治身女

或說源道成守

或說源道成守

或說源道成守

漢海左近主

延政ノト

佐木守

延政ノト

藤原興風

或說下總瑞守 正六位上治身女

相模守

或說下總瑞守 正六位上治身女

或說源道成守

或說源道成守

卷之三

誰とも思ひ難い事の如きある

むらをうかがふる年老てぬ所をと  
まへき行ふ歳はせうへりあう或も  
そぞらそぞらとくわくわくひら  
のひらは朋友のうきよにゆるがれとす  
ら年ゆゑゆゑとくわくわくひら  
くね行跡くねとくわくわくひら  
つらかへ事宗因あちと來くわくひら  
又びらかふくわくひらとくわくわくひらと  
心をもあて裏ふと歌くわくひらとくわくひら  
角のまやくまのまくわくひらとくわくひらと

五

紀實之示圖亦別如身外或說紀文新子

卷之三

せふと處とすて入はれりあす病のちと  
ちのじつうに准れんとひくぬとせふ  
めの物情うちかた初とまことと義理不知事  
連教と用ひ必ひとう初と連教と半  
小半下下と事ひいと事ひよしりと  
又喜とまこと考ひいと事ひよしりと  
うふと行てまこと教ほの心とまこと教  
者とまことうとまことうと行て  
思ふ

廿一 清原深美食文

先祖観二院寺前守房  
則男一院院家御庭屋

廿五位下置免藏人所難也

則子一  
行持之

清原深美食文  
延喜之年  
其說是五年後舍人允  
也  
文庫朝床  
先祖不見文庫  
白鳥山因の吹

じの所へまわるにあつては、すこしの間は、  
心事も當てぬ。ゆゑに、氣づかぬとめで  
む。あふくほんじゆうとめのやまとをとめみ  
て、あくびのよきのむきがれたり。まづち  
ちの間は、伊豆の風あらと吹ふよどみ  
うちの間は、伊豆の風あらと吹ふよどみ  
うちの間は、伊豆の風あらと吹ふよどみ  
うちの間は、伊豆の風あらと吹ふよどみ  
うちの間は、伊豆の風あらと吹ふよどみ  
うちの間は、伊豆の風あらと吹ふよどみ  
うちの間は、伊豆の風あらと吹ふよどみ  
うちの間は、伊豆の風あらと吹ふよどみ

斐

左近

又不和の處を拂ひあしむ左近が云ふ  
事もあつてひづひ下野と  
都を賣る事もあつてひづひ下野と  
都を賣る事もあつてひづひ下野と

日記

左近

四十一  
えもん

五言律詩  
五言律詩

九  
冬讀詩

天歷三十  
莫廿二

元祐皇帝

廣陽帝  
弘聖位  
孝  
等  
御濟  
漢治等

歸宿姓

立成子等  
年  
四

讀書生此書之志乃不復可得而知之也

予序多讀書生此小記亦不與之奇哉

予之多讀書生此小記亦不與之奇哉

予之多讀書生此小記亦不與之奇哉

予之多讀書生此小記亦不與之奇哉

予之多讀書生此小記亦不與之奇哉

予之多讀書生此小記亦不與之奇哉

四十二  
平蓋國

後五位正  
驥行等

東門賓房

赤染衛門

於達

予之多讀書生此小記亦不與之奇哉

天德乃有余之志亦不與之奇哉

忠心湖城郎

予之多讀書生此小記亦不與之奇哉

忠信行

高祖  
威等後五位正  
赤染衛門

東門賓房

於達

之志とトヨリセラニシの如きをも  
ノシモリハ人をうめく聲のをなすも

平一玄惠見本多實 東家男

整 天德二年 任持津大内

事とすらあまうに至らすがゆゑなり、  
かく天達の食の所ある所とてひよるをこ  
紙にちぢれどもテキラにやまゆるが故に  
何れかひきぬれども、まことにやまゆる  
前かとねやうりは筆心を失の事もあらず  
かく天院の絶えぬ事もあらず、あれば  
かくちうすうあく重慶がりけりとて

あすを氣とぞとて、はきに移りたる  
じつもよつや居たるどとて、年々もしくて、  
あすうれむるわざとくせうりのと多徳

四一清原元博

蓬萊文殊 東家男

肥後守 俊五位

篠水

奥主れども神とまかりにまわるとほゞと  
初からうてゆるゆくすらうて、まづとあり  
君とよきとあてて、ひと釋たまわねば、故に  
まづりめり奥州の多あじは等が半邊ひと  
波のうねりすらまづらうんとソアリすあり

えれどもかひのまへてあつたうつむきよ  
ゆきよりて故ふるはげみとおさり  
もひよしよしよしよしよしよしよしよ  
かくわくわくわくわくわくわくわく  
かくわくわくわくわくわくわくわく  
かくわくわくわくわくわくわくわく

平三 権半納言致忠

時平公三男 實、國、彊分之  
母蘇前守，在原棟梁女

忠仁公國經  
照宣室

特平  
久信公

卷之二

心孚批把中納言  
天曆六年二月薨

劉是人外也作太祖王

卷之二

也世傳一歌云、  
「おのれの君は、いとまじめの國に  
おもむかへし。」  
とある。又其の子の定高は、  
又主に江戸を以て居た。其の子の義高は、  
うなぎやさんと號す。義高の子の義  
久は、義高の死後、江戸に歸り、義  
久の子の義貞は、義高の死後、義  
久の子の義貞は、義高の死後、

四三 中納言朝忠

三義在後室方二男、第十四代也



主として江戸に居たが、その孫の義高は、  
もはや不本意の心で、さうして都にあり  
て本郷に居住する事多く、年々うるさき  
争事の心がちくして、午中後もあわざと  
そぞろ相もあらざり、身も心も肝心の東海  
う一旦の本郷の宿へ通じて、少しもぢや  
主とせば、車上であつて、梯子をさして、まことに  
も、心事本末大にひとりと、ゆみ文書と、此の御物  
とすとて、祇はてあらぬものにて何とぞと

嘗てはあらましとぞもあらず  
水をさむに泣きて年月とくにゆ  
うそゆうあひのうへ又うそとてうそ  
うそにうそありまじてはな  
うそにうそありまじてはな  
うそにうそありまじてはな

五 諸徳公

備後守伊弉諾公 九條右京相師  
家藏守連那女 天保三十二薨三十

豈後機集吉 挑し時威人ナ將 和歌ハ齊カ遊也  
諱ハシ謹ハシ之政長ハシ萬官ハシ薨ハシ之ハシ念存ハシ之

一國封セウ仍半石筆無ハシ以薨ハシ元特辭退ハシ

貞信公

吉野君  
諱公  
伊弉諾公  
行成公

春宮院  
行成公  
行成公  
行成公

整

あらましとぞもあらず  
水をさむに泣きて年月とくにゆ  
うそゆうあひのうへ又うそとてうそ  
うそにうそありまじてはな  
うそにうそありまじてはな  
うそにうそありまじてはな

六 曾祢好忠

先祖不見  
位母後様  
曾祢曾母

ものあつたる年からとてあまきを奪ひ  
もうじと曲良濟に代り國に來はせまわ  
て心之處とすと申すが爲りかんたりとす  
金子寺へまわるとこゝ裏のそばしやう  
えすくらしめあがめとソラ曲良濟とすけ出  
がり早毛と申す、さういふと代  
きとて

甲七 恵慶法師 先祖不見 寛和院 檻

回歸

高集

金庫をもとめぬるをひそむとみを私事  
御事よ御事院にてきてお前を替へと云ふ  
とくとくひげをあらはれは初うそ心がゆま  
草をあわせ鶴の内をもぎりやうと  
者もあねのよきひととておとてうりま  
あゆうひくや候御事院の者とまづて  
おとせじかくとみり三吉院の続を心へ  
金庫へもとめんとせば三吉院の続を心へ  
りまくらうと申すが爲りかんと申す  
おとせじかくとみり三吉院の続を心へ  
來まくらうと申すが爲りかんと申す  
高祖の御事と申すと申す

天源重之 王儀子 先系志

清和天皇 貞元親王

正平下  
足利院  
三木海那  
正平下  
大島忠賀  
賜源姓  
大島忠良  
三木義高  
正平下  
源院坊  
特事力

詩守侍臣  
足利院  
大島忠良  
賜源姓  
大島忠良  
三木義高  
正平下  
源院坊  
特事力

重之相授守

開

風とておまえの御のそとのみとけてゆくよとて  
御ち冷泉院のまえすりとてお首をうぐふとて  
あり紙に公とてうきにうきを察とて人の心とてうき  
きとて浪とれすとれすとれすとれすとれすとれすと  
ひとてうきとてうきとてうきとてうきとてうきとてうきとて  
手とてうきとてうきとてうきとてうきとてうきとてうきとて  
手とてうきとてうきとてうきとてうきとてうきとてうきとて  
とてうきとてうきとてうきとてうきとてうきとてうきとて

四九 壬辰總宣朝臣

祭主 祭主 鞍

・天皇唐根十九代孫・常般多連云始賜牛に連本者ト即レ  
中者主神事之宗源

太白小法冠祭主

可多能祐連云國子大連云國足意義唐清唐

本者ト即レ  
中者主神事之宗源

各主

祭主 祭主 鞍

伊勢源院房

開

みとて守清生わづか火の下へひひひはくやとせ  
ひうとてうり世守内裏の沖恒と守者衛士  
左衛門へ下つて主へたまつれば口直と守也  
船火とて守候と守候と守候と守候と守候  
火の下へ守候と守候と守候と守候と守候

の筋も心も体一貫の胸うちである  
せんとあらわす。サシセレモノ。  
アセラルアラハタシ。アラタモア  
ハリシヒサニナムトキモアハメ

思ひ立つ。

**五十 藤原義教** 諫綱三男。号後將下。

妻中務卿小明親妻。

**五十一 藤原實方** 朝臣。卒將正下。諫實子。

君無事御存。

或說康平二、八、六。

配流充國。此不寫。

考無事御存。余。余。余。余。余。余。  
御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。  
御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。  
御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。  
御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。

**五十二 藤原實方** 朝臣。卒將正下。諫實子。

貞信。

諫義子。正将。侍從性宗。

左奔。侍從性宗。

宣特。

諫義子。左方。宗。

實方。長德四王於充國。

卒。

が生々小生やい。まもる。草内もまし。す。まもると。伊豫ふと。近江。滋賀。高島。京都。おほくと。おもつせり。まこと。おもと。月。まよ。むすめ。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

之主よりぞりとおもせんや

よきと胸あすがひとえいひをね

もごそとらんと我の切るの胸をかき

とひもとまくとほりめうとあらわせ

えうそひにの儀と主を洗ひ洗えやうゆ

あらわせにそとてじそとおうとけり

只身よみやうとまくとくせ、泣くとひ

とあらわせにそとてじそとおうとけり

月母の歎とくとあらわし、落とじて

竹の芽と落葉とけりおれとけりおれと

冠とく袖とさわとせきとそこあらずても

さくとく乱穿よひとくとくとくとくとく

のとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとく

平二藤原通信朝臣

恒徳翁男

母謙徳女

公義右衛相

京管侍

公

恒徳

公

恒徳

公

道信

大中將

後四佐上

師輔公九男

書藏于藤經邦

公

恒徳

公

道信

母謙徳女

正廣五年卒

三十三

年

九月

日

御文

又西司馬卿之子中子延長子玄  
後の子アヌエシ半才トテ御前御子アヌ  
列久ゆアヌヒカヘシ御子アヌシテノジトモ  
玄をリムルムレムル曾之御前也安同子アヌシテ  
難シムアヌヒカヘシウタ良乃奉子アヌシテノジロ  
アヌモナムツシテツトスイクアヌシテノジ

### 平三右衛門將道隆

東二条道隆白

兼家室藤原守  
侍掌女

九条翁

李寧法思流遁中間

儀同三司伊周

朱朝古今表古今内

通雅

大京文  
侍掌女

伊周

通雅

通雅

大京文  
侍掌女

道隆

後撫達萬內侍下

通雅

通雅

大京文  
侍掌女

伊周

後撫達萬內侍下

通雅

通雅

大京文  
侍掌女

通雅

通雅

大京文  
侍掌女

高経

高経

通雅

大京文  
侍掌女

高経

高経

通雅

通雅

大京文  
侍掌女

高経

高経

長毛一票署有本丸近石室府周三票序東京帥  
内大臣儀同三司、私臣儀同三司、三公、准允  
初例准大臣一票代之是又准例トモ云准位唐  
名儀同三司ト云若列トキリ。

新  
口事の如事として之を之に於て令下され  
刻字中間墨磨りひも等多めにあらうとあり  
毛も多き事に於ての事に手のものとされ一毫  
も少くして消えさせよつともゆきゆめられ清  
きややかに夜の事もこの心づくわざと  
ノリ純く刻字のとく下る所へ居たまふ  
内内妙

五  
平文

太納言公任

康義公男号西園太納言

清瘦平野  
平將立下

敦教

墨、三本筆能書三體之内号伏翁

實賴

能書三體別當

榜政不政不

書平立下

賴志

康義公惟太納言正三位別當

公任

能書能書能書

和良明詠集撰者

余虎津特字西園

義人

定賴

能書

は朱任の御と同時ハ筆書才く三才の才也  
毛り加えて之を參かす其筆才く又才く及  
あくまで御承り候少く也一才の才也

御字大筆手にてゆきうち其才く又才く也

今才の才也あり先達傳之まことに

の代わるを歎かす事、有鬱居  
めりしなむと云ふも、はなまうて学問  
すすめし後、主の事、没して、心に感動  
すも、いづれく者、相もて教りて、ゆきし歎き  
ゆまと行かんじて、まことに、下へあらし流  
て、わざまこと、ひきこむて、まことに、  
たゞあらへさんじて、ひきこむて、まことに、  
わざまこと、ひきこむて、まことに、  
わざまこと、ひきこむて、まことに、  
わざまこと、ひきこむて、まことに、  
わざまこと、ひきこむて、まことに、  
わざまこと、ひきこむて、まことに、  
わざまこと、ひきこむて、まことに、  
わざまこと、ひきこむて、まことに、  
わざまこと、ひきこむて、まことに、

かうすと考へて、

新編古今類聚の七編ノ精良ノ書

### 平六和泉式部

上東門院女房 大江雅致  
典故中守集解上 異同清親詩集解房侍

和泉守道貞ノ妻トモ仍考和泉式部

一説

高遠

貞高

女子

上東門院女房

右、一説有トイ共 梯遺第廿二云

性守ヲアリトシテ、くはくを推致

妻ア致

致不寄

新編古今類聚解上

謹奉平樂院ノ用

後撰

あゆみをかのとを、またひかみをとて、  
刻きつゝときあととゆるひよけつたと  
ツと今ととすととくととくととくととくと  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくと



心もうち用よ。又いやもと見ておまつりた  
うらの序也。喜之殿之は前事也。是を  
ありふる事也。席を代へる事は、其後つづきて  
事の公事也。公事もすこし下りて、そばに公  
事とて、とて、とて、とて、とて、とて、とて、  
とて、とて、とて、とて、とて、とて、とて、  
とて、とて、とて、とて、とて、とて、とて、  
とて、とて、とて、とて、とて、とて、とて、  
とて、とて、とて、とて、とて、とて、とて、

平九郎深衡一東院事房、或鷹司殿事房

後拾

居まつて候す。わざよけぞりす。月とく  
羽子中間中間かわゆるむすめ。年下がひ  
てねいひきうちゆゑをめぐらす。内りまつども  
せようじよめいとおひじきの羽子のくわい  
とおひじきのくわいとおひじきのくわい  
わよと居まつて候す。うれし御事也。やしきい  
とく後悔後悔とくとく居まつて候豫豫の心

あくへどもひやくすくとてよしめりす月  
はるかとせんとすくとてよしめりす月  
あらじとてよしめりす月

高弟高弟とてよしめりす月

高弟あともし高粉高粉とてよしめりす月

はるかとてよしめりす月

相馬守六平 小玄部内侍

相馬守 橋道臣 奉事

橋諸兄生七世孫仲遠道貞

小玄部内侍

大江今ノ野今ノ野の玄済玄済とてよしめりす月

相馬守和泉守和泉守保昌保昌とてよしめりす月

比致比致すと金と金とよしめりす月

中納言室羽室羽つわのよしめりす月

母後母後の玄済玄済とてよしめりす月

トト子トト子あともし高粉高粉とてよしめりす月

うそらめりうそらめりありえありえとよしめりす月

泉涌泉涌とよしめりす月

相馬守和泉守和泉守高義高義とよしめりす月

はるかとてよしめりす月

おまくらおまくらとよしめりす月

とよしめりす月

吉野守吉野守高義高義とよしめりす月

モニテ文乃公トモウリ刻焉乃はソラトドハミ  
和泉寺ノ小室アリ又乃和泉寺通貞ノ毛也陰  
義厚傳湯母後守ナリシ才ノアリテリモ

卒一伊勢大輔

主事師親女仍号伊勢大輔

記

系圖上東院安房  
大中臣正統宣下アリト東院淳宣特准ト  
サマカタマサニテ主機ナカニシヒキナム  
御子一系院の時名良の主機トノウトテナリ  
名多とヨリトシテナリトナリトヨリヤハシテの機  
名多とヨリトシテナリトナリトヨリヤハシテニ  
クスジの主機トモニテナリトナリトヨリヤハシテニ  
ヒオトモトシテ名多とヨリトシテナリトヨリヤハシテニ  
テナリトモトシテ名多とヨリトシテナリトヨリヤハシテニ  
ナリトモトシテ名多とヨリトシテナリトヨリヤハシテニ  
ナリトモトシテ名多とヨリトシテナリトヨリヤハシテニ

卒一

清サ納書

清原一元師二女  
一系院皇后室等房

後孫

夜

松草ナシケタノ毛の下ノ宮園の毛モモチナリテモ  
夜モモチテ鳥の下ノ宮園の毛モモチナリテモ  
刻ちよニ切き紙やわらぎナリテ紙下ノ宮の下ノ宮  
ナリシテハシナリテはモモチモモチナリ  
モモチモモチナリヒガモモチナリモモチナリ  
ナリシテモモチナリヒガモモチナリモモチナリ  
ナリシテモモチナリヒガモモチナリモモチナリ  
ナリシテモモチナリヒガモモチナリモモチナリ  
ナリシテモモチナリヒガモモチナリモモチナリ  
ナリシテモモチナリヒガモモチナリモモチナリ

まのふとくしておもて身のまへに要事を

そひへ人奉よろこひをわゆるかうき

時は蟲音は聞鈴りゆうねうらへども

蟲音名う三すれ客せ牛の羅鳴とて鈴りゆうとく

もうちあううれ鈴の声みゆうきれしもの鈴  
も呼ううのねうすく圓とあけくみゆうかうと

ひうきくねうとくとくとくとくとくとくとくと  
すくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

六十三 大家才甫通雅

師内官 伊園雲

後

後三位公言文

後

後三位公言文

後

後三位公言文

伊園

通雅

和宣旨 後三位公言文

後

後三位公言文

刻字伊園の母文とてりやのやうにやうに

せひてかひひを事とちやをとめりてゆく

ひめかひひをとれせひひよめよめ

ねじ刻字とあり事のゆめゆめ

ねじ刻字とあれかひひ後

後三位公言文

後

後三位公言文

林義母也。けしきにまじり角で、やひ  
をもと育てらる。院主事院室女あゆみよ家  
通義門て消息。院主事院室女あゆみよ家  
をもと育てらる。院主事院室女あゆみよ家  
をもと育てらる。院主事院室女あゆみよ家  
をもと育てらる。院主事院室女あゆみよ家  
をもと育てらる。院主事院室女あゆみよ家  
をもと育てらる。院主事院室女あゆみよ家

松島山院院大院よ

六十四 権中納言宣頼

公位男  
母妻

系圖公位下見父。権中納言正一位者有  
朝かけ御の川旁経。あはれとち浦。御代  
字源すよりと云ふとあり。もの多く。

成りて六十字。序の御。よき事。故に本  
と之とより御代莫と云ふ。此の因  
そもすら御代と云ふ。て御と云ふ。本  
公位下見と云うして御と云ふ。時々之を  
御かけ御と云ふ。もともと御代と云ふ。  
さればそれ流してある。と云ふ。あはれと  
云ふ。本と云ふ。やまとひき。生業。御。御  
御院と云ふ。御と云ふ。御代と云ふ。

六十五 相模

先祖不詳。入道高僧。房中若

侍従

式院相模守。大江。資。或妻正法。は故に相模守

一說。安能登守。慶保。母

恨とひやみの神アマノミコトをあらわす事アラハシテと能

永承五年内裏奉令アマニシテとあらわす事アラハシテと能

行司アムニシテとあらわす事アラハシテと能

子アマニシテとあらわす事アラハシテと能

子アマニシテとあらわす事アラハシテと能

小やアマニシテとあらわす事アラハシテと能

やアマニシテとあらわす事アラハシテと能

ひアマニシテとあらわす事アラハシテと能

いアマニシテとあらわす事アラハシテと能

ちアマニシテとあらわす事アラハシテと能

まアマニシテとあらわす事アラハシテと能

右アマニシテとあらわす事アラハシテと能

## 六 大僧正行尊

大僧正法號

三乘院寛仁  
蘇東坡小一乘院建仁  
建中院渡基平建平  
建平院行尊

大僧正法號

鳥羽白河院護持僧

禁松林玄雲鳥羽院時行尊儀正風和院後室庵

法號

法號

法號

法號

法號

法號

やえの頃の事はすまへてさうひに梯子  
（卯月）どもりの事と云ふ事の記しりか  
多くすりとひどく残る事ありて多々也  
ひくひき身をすれり身を身にせしと云  
は筋も小寺院の梯子馬鹿院の梯子と寺  
寺馬鹿院の門をくわとあそび内室と居り  
て坐り入る所ひきよれしから梯子と身筋  
くすり身を身にせしと身を身にせしと身  
くすり身を身にせしと身を身にせしと身  
身を身にせしと身を身にせしと身を身にせ  
身を身にせしと身を身にせしと身を身にせ

吉野院

キルシカの身を身にせしと身を身にせ  
は身を身にせしと身を身にせしと身を身にせ  
は身を身にせしと身を身にせしと身を身にせ

空も周防内侍

仲子、後冷泉流房

桓武天皇 葛原親王 （大内言後位） 高棟 惟範 時望 （中納言後位）  
（伊勢守） 真義 （安藝守後位） 壮義 （用房守後位） 錠仲 周防内侍

千載

身を身にせしと身を身にせしと身を身にせ  
身を身にせしと身を身にせしと身を身にせ  
身を身にせしと身を身にせしと身を身にせ  
身を身にせしと身を身にせしと身を身にせ  
身を身にせしと身を身にせしと身を身にせ  
身を身にせしと身を身にせしと身を身にせ

身を身にせしと身を身にせしと身を身にせ  
身を身にせしと身を身にせしと身を身にせ  
身を身にせしと身を身にせしと身を身にせ  
身を身にせしと身を身にせしと身を身にせ  
身を身にせしと身を身にせしと身を身にせ  
身を身にせしと身を身にせしと身を身にせ

萬物よりて生れ候事無事もとづひひを爲す  
事無事の爲事也ひひくこととひひくらべて  
生きて育てく事くすとひひくことひひくらべて  
うるる事くちふ曲かまわどすさんひひくと  
又喜むるの喜むれがくじうとのうれ儀事く  
やく行なじうる事くじう樂せんもああれ  
うるる事くじうる事くじう樂せんもああれ  
こくも伊勢ノ浦ノ水を空やくひじゆゆく  
かく本作とよくわくす乃はトトとくわくく  
とくわくくも行佛居高麗國行佛居高麗國行佛居高麗國

乃くあらてれあくまくの果報とく下の  
心事留めやひうてつと忘却す事無事也即  
序の如參天性隨修の上にてて下に下く  
とくもくとくとくとくとくとくとくとくとく

玄武三條院

譯辰貞

金泉寺一門子

在位五年

玄武

玄武

天正正三洋訣

宣和モ去東宮

今日元服

寛弘

長和五年

讓位

寛弘元年九月去家

翌月九月崩

村上天皇

冷泉院

玄武

玄武

玄武

玄武

玄武

かくもくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

行冬月のめづとまし御所にてを射  
多とあり御はるがゆきに仕ておむねと  
ほく下御齋御へりてとまんとあ  
めどり不意と父奈とまを行へば禁  
中月はくちり高くもととく  
下御うちれゆく下は門の答水院  
かの皇室に住むよりメナ年少より  
未まくらと食みとおりわを行へんと  
御城一ゆふあく興念(ミヒテ)とてとく  
立入じうと見行下は又じ門の月と  
くらむを行へまくの事はくやうと  
えさせらるや

卒能周清師

俗名水隆長年肥傳

号志曾郎

金

元和

鶴諸尼

奈良尼僧院

金

金

元和

忠望元怪

能周

金

金

元和

者是不引水と云ふをまでも神氣  
はく小くもとぞそらもかくの國の事  
長柄ひ鶴板の事と云ふをもねだる  
す

尚アシヌルの事と謂用川錦ぢうち  
承業年内裏主合せりはあへてふる國  
太時良馬事氣とわらそとびとあらせてみ  
ゆきまくらみを事ニシテの粉骨

辛良羅法師

文  
不  
言  
孤  
原

白山の事は御心懸けておもひ  
せらうとあり。かくして御法を書  
せし下駄屋様にて伏てておまつり  
まづ、お詫びせしゆゑを乞ふ事も  
あらず。詫せしゆゑ外の事は  
よからぬと申すと打まししておどき  
ておゆの事。おどきておどきておどき  
お風でく爲めまちだ。主事のまへ  
秋ちくさんもともとおまつりに當り  
と仰ひ等と申す。又御手すり風上  
の事。又三重二重と申す事。

ちかとあつてあくせきよと

## 七二 大納言經信

中納言通方男 薩國女

宇多法皇

二三式アラ

故實親王

雅信一室尼大臣

誓信道方

正三

經信修羅信

金家

雅信一室尼大臣

誓信道方

正三

經信修羅信

金家

ノミノ門田稀家事法ノ書り也即ち稀風也  
じうち田家稀風也すとより苦のれをとされ  
おめくらにそゆきとらしも門田稀家事  
ノ書の稀風也よとゆくとまくと間もとを參  
く意の風情と毛利當り勢力也アヘンモシ  
又それの御内令が下すと毛利當り勢力は  
もとととととととととととととととととととと  
ハ世志也和也から庵廟江主の面首よ  
ノミノのわくれと非くとまくとまくとまくと  
とあり并は自筆手写と云ひ也とあり是不  
審乃とととととととととととととととととと  
ととととととととととととととととととととと  
ととととととととととととととととととととと

## 七三 祇子内親王家紀伊

散位平經方女

栗年

祐子内親王

後朱雀院

二三皇女

中宮源

故康親

紀伊守重連妻ノ故

紀伊

トキトカリヨリ

松澤シット

トキ

桓武天皇高原親王高棟惟範時望真松親信

ヨシヒコ

行義

範圓

經方女

金葉二宮經方

同也

金家

韦小園のいの津代を以て被つけて被つてはされ

所流り守りてりやを含み中納言傳忠

全永多ありとれの内波代りていゆれ

は奇妙にとてあくせくあくせくをとくの津

之れをかく事小失はてて不思議と云ひ難かりけ  
事多く其の事の如きの如きに於ける事多く  
かうあくまほ防ぐを以てやうとぬまうみつめ  
神の御子よしむれどんじき心約けどもあく  
ソムカセドモ可と云脚りむるに不かく身のう  
少て口面ゆく竹のうと

七十三 樂中紙言匠房

母樞密親女正二位大廕之太寧指歸  
吳江師

大江奇人左維特重光后御舉臣所行  
傳 傷 傷 傷

臣房和漢文

多數の尾下八極の如きを多く見  
てゐるが、その中で最も印象的

まうじゆうよ達望の爲めにとある

卷之三

新之助の事は、此處に記す。其の妻は、  
新之助の娘の夫である。

卷之三

卷之三

文

源流類記

住信男母貞高女金

卷之三

侍候は行方不<sup>見</sup>とソラノトハシムとありやれ  
意とハウモニ往古の傳シテナリ主事脚の事と

年もて不朽の事もあらましの度りと  
とありこそゆめう年かく處にまわせ

ゆすうちうるそとくにけいとれども  
御用のあらうとくにまの松前へ行きて  
人のいはれをよそうまでりとおふく  
すまくそれとくにまをうきとひづねわど  
うち主事とくにまをやは年とよく刻  
ゆゑをもととんじけくくゆとく

とくすく紀念とく

七五 藤原季俊

伊家翁 奥津奥年波古

頼宗

後高

英俊

新井明承集

通神

伊佐久

通

まうと行きをひきぬく余水あくらと大崎と  
刻う、傷経えを奉候、眞維摩令此誦師の活  
けとあらゆるをされは性も全まく政臣  
門とあらゆるのとゆる又年とそれ  
くらえてけとあらじ舍と興徳のいく  
毎年十月十日より十六日しておまく海門を  
内長と宣へよしとおもはせ等多々歸り  
ほじゆすておまくおもはせ等多々歸り  
おまくおまくお風とお義繁年とあんば  
はおまくおだ身とおまくお風とお義繁年とあんば  
おまくおまくお風とお義繁年とあんば

刻て、女金石にしりてだら風かくとすとあられ  
ゆきをうかぐ一三十九石の檜茅原下  
野の山へ

七十、清性寺入道前園良政大臣

中進公、後院良政、後院良政、  
一位法尊親

延流院白男

母六康在大臣頭房公安

道長

通

師實

通

良經

母大平親女、母安平親女、母安平親女

忠實

畜家白

忠通

通

慈因

慈鎮駕

詞元

正月の厚づれをて、年次は之無處を身にぬるを難段  
刻字新院位よからず、時節とをもむとす。  
ととあせ行ひゆくよあとめとめとこころす  
ううてソニモと地うとの色事よからむとす  
やうのましとえと母じゆくらむ心程か  
名や奇をあとめとぞありて、得精さりて精義  
一ノ泊す春水船如坐天子であり又玄真言

勝國

秋水共長天

通

而ねばら見到地うとあふかとれども、空  
ううと只風情とがくをひきひき、形と  
字とがれとおなみの爲とて、物とあら  
多々、ううの西とくせん

七十七、崇徳院

詳題仁鳥羽院等、百事

母得賢院院事、内言不實人祖、周常道主

元永二五十六降故同月九日為親王安宗正八為

太子即受禪。五月十九日即位。大定正

翔元賦

永治元十二月讓位在位八年  
保元七年

其之能流譏汝也去之日於仁義守其家長寬

六部尚書  
追封少保

追考之家傳說

鳥羽院

七十五代  
一宗德亮

第一宮

七  
後漢書

第十四章  
在位三年

十七  
卷之二

卷六

詞苑

卷之三

昌濱後獨一男後立後下室無子

金華

清風萬里來，明月一孤舟。  
獨坐幽篁裏，彈琴復長吟。  
深林人不知，明月來相照。  
此情無何處，但聽黃鸝鳴。

宇多天皇歎實親

王雅信時考

將半朝往師改後病  
李公樞

將半朝往師改後病  
李公樞

朱  
卷之三  
庚午年  
仲夏  
良醫  
王仲達

とゆるはまと二入旅度の御子をもててひやう  
國守のトリノハハハハハハハハハハハ

とゆるは處處の居し酒食家にてまこと

とゆるは一夜乃旅ひてあくと國守のハハハ

とゆるはじかとソルねくわくとくとくとく

とゆるはあわととくの多とくとくとくとく

まうかくの月を前にせうかたに  
あまよとてゆくゆくゆくゆくゆく  
みゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく  
源氏院はまわられまほれ織さうせう  
雪がくまうむくまうむくまうむく  
かくまくまくまくまくまくまくまく  
ちかくまくまくまくまくまくまくまく  
とくまくまくまくまくまくまくまく

同上

八十侍賢院河 神祇御仲女

持上元皇子集書

御室下

大義大臣

神祇御仲

侍賢院

房

具平親王

御室下

大義大臣

神祇御仲

侍賢院

房

白船院

御室下

大義大臣

神祇御仲

侍賢院

房

裁

仲房有房寒房侍賢院清安氣は嘗て移可  
は尚ほ齊別一寺也

かくもあと黒聲の聲くまくわとそとそ  
封號は清羽庭とあり齊別御集と云急乃乎す  
そめめと心と想とくの重き御りとすと  
そめめとおととくとくとくとくとくとくと  
そめめとおととくとくとくとくとくとくと  
そめめとおととくとくとくとくとくとくと  
そめめとおととくとくとくとくとくとくと

アラヒテハヤシマツト

春宮正二

八十

後醍醐天皇

實定云

御室下

後醍醐天皇

後醍醐天皇

實定

公實

通事

行

實定

公實

通事

行

實定



八十三 皇太子宣之集後序

顯捕之多時顯廣後沒復厥安先元大集家

元先十一歲薨于文士年於尊所賜牛賀

董開白

董開白六男入納宣之正三位皇太子

帥羅陳正三位皇太子正三位

定家

正三位皇太子

家

道長

董開白六男入納宣之正三位皇太子

帥羅陳正三位皇太子正三位

定家

正三位皇太子

家

家

長富

董開白六男入納宣之正三位皇太子

帥羅陳正三位皇太子正三位

定家

正三位皇太子

家

家

志家

董開白六男入納宣之正三位皇太子

帥羅陳正三位皇太子正三位

定家

正三位皇太子

家

家

後忠

董開白六男入納宣之正三位皇太子

帥羅陳正三位皇太子正三位

定家

正三位皇太子

家

家

後威

董開白六男入納宣之正三位皇太子

帥羅陳正三位皇太子正三位

定家

正三位皇太子

家

家

千歲

右中多才子也多才也多才也多才也多才也

刻才也懷才百首也才才才才才才才才才才

才才才才才才才才才才才才才才才才才才才

又盲か入らじ時へ幸ひテ

**八五** 藤原清輔朝臣

興師事 系圖がうり  
公皇太政官布工達正位下

新かた

又文也其事事はんじとおもむ  
ひうそとうそ奇忍也此も小者と大者と  
くわざもとくわ時代と之をもと後と思はれ  
るのと方々心で詮すに奇とことを中世人  
あらしもあとそしゆばうの書  
威勢あり才子ト奇人也とほうきとくわ  
とせてソシキの事こころゝ之間とせうて  
雪と一死に辛氣り下へ上もとしもとて善  
いはあらま事とよ便能うと

**八五**

後惠法師

經信子殊後惠法師子

夜すれやかに此の聲ね経  
無うきよとよあうとありやくゆり改めまし  
とあく今もあらが圓ひまくゆくにまきま  
はあくま半をとてはまうれ経の如く  
あとさうひ又行と見て廢はせとの圓ひま  
とあくまうきよとくびれりとくふくま  
うち又うの手廢り紙は云ふやくわざのア  
えけまくらううとつま前後くとくわ  
とくあくまえのうとくま前後くとくわ  
ほひゆくわと根の下のうとくま  
西教もとま車を走る車の経の圓ひま

アトサ欲アリモヤマニ

八十六 西行法師

俗名義清或則清又是清

藤原康清子ノ養清鳥羽院下小西

萬石公儀第下後主藤原

後主忍清

忍清忍清

忍清忍清

忍清忍清

忍清忍清

公義清宣月上

忍清

忍清

忍清

忍清

忍清

公義清忍清

忍清

忍清

忍清

忍清

忍清

千秋

アラモト日アシカサカシタタケリハシテ  
月前立キリムシテ後後月ジシムシルカシ  
ヤクルムシテ月立ムシトツモシシルル  
ウタムシテムシトツモシシルル  
アシカサカシタタケリハシテ平穏乃體也  
アシカサカシタタケリハシテ平穏乃體也  
アシカサカシタタケリハシテ平穏乃體也

里

アシカサカシタタケリハシテ

アシカサカシタタケリハシテ

アシカサカシタタケリハシテ

アシカサカシタタケリハシテ

アシカサカシタタケリハシテ

アシカサカシタタケリハシテ

アシカサカシタタケリハシテ

莫對月明思往來損君顏色減君年

損君

顏色

減君

年

莫對月明思往來損君顏色減君年

損君

顏色

減君

年

八十七 寂蓮法師

俗名

中華

忍清

忍清

忍清

修業

宣長

京邊

修業

猶子

宣長

修業

修業

阿闍梨

忍清

忍清

忍清

忍清

忍清

忍清

明月託云建仁二年七月廿日午時許參上尼半身  
入通達去未可及故用乞即退坐已辰  
為輕恨身也浮生無常難不可敬焉今聞之哀

勸之難禁自切思久相別已及數日過於  
和尊道有賄者傍輩誰幸已以奇異之遠物令神  
泉為通可報於身可悲又空氣無奇  
乞之弗通云之

乞之弗通云之

約古

玉之不使也而也使之使之往無作  
村無為無也也無為無也無也  
無無無無無無無無無無無無無無  
小又無無無無無無無無無無無無  
無無無無無無無無無無無無無無  
無無無無無無無無無無無無無無  
小又無無無無無無無無無無無無  
無無無無無無無無無無無無無無  
無無無無無無無無無無無無無無  
無無無無無無無無無無無無無無  
無無無無無無無無無無無無無無

無無無無無無無無無無無無無無  
無無無無無無無無無無無無無無  
無無無無無無無無無無無無無無  
無無無無無無無無無無無無無無  
下海無無無無無無無無無無無無  
無無無無無無無無無無無無無無  
無無無無無無無無無無無無無無  
無無無無無無無無無無無無無無

十八 皇嘉門院別當

深信謹文

皇嘉門院事子法性寺圓白女史納言家通安  
家德院后道衛院准母別當六物之大藏

具平親王師房

御用文

師忠 師澄

皇嘉門院別當

深

高

雖故爲之不無之不無之不無之不無之不無

少

八九

卷之三

後句第十三首  
齊東野語三宗  
安陵二家子力節  
孝感公墨奇

白羽齊之印  
後白川院  
每待賢門院  
在位三年

立御事  
假方國  
大二年在位土年  
頃征羌義兵流亡國  
母賜九卜流子女

卷之三

卷之三

卷之三

百首の詩中是意のふとあり考へ思ひ出で  
かくさとぞ。かくの日とやうがてかくの夜  
かくの事はうつむせあらゆる心とよもと

中は意の外と有  
りし日より  
かづらひをせぬ

うすくら  
うすくら

徳をもつておらぬ、ソラ博士性のうす才氣も沒有と也  
多處に見ひだつてゐるが、さう大なる算術  
もあつて、浮き思ひでたまうるゝものばかりで、  
やうやくそぞろそぞろと、少しずつと

治室之一ノトモ不振アリトモ心アリトモ必アリ  
シテシテトモハキモトモ利アリトモ

牛

殿當門院大捕

殿當門院

後身御皇孫

馬輔中御言

九今

本

送

上院奥守

信

管

女殿當門院

捕

或說言而相八世孫言原在良女

千秋

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

牛

牛

牛

牛

牛

牛

牛

牛

牛

牛

牛

牛

牛

牛

牛

新古

後法性寺金蓮院圖真實  
正三位 藤吉行女

玉露鑑

僕のやむを得ぬしの衣を背とらる所見  
百肩うつてゆきり心のむれのほ遙  
衣ふあ稱称とも考へる事無く着  
べえ然の寶玉と古也かてよしめじきわ  
又詩塔碑入所下とう金のいきあひまくわ  
只善とさり一宇と何の刻にあ給ふも年  
か年かとやまとちとぞとぞとぞと  
ととて刻り給ひと考據達々く取とせりと  
そり丸の三川の山鳥のうとととととと  
事表すと三川の山鳥のうとととととと  
刻り可とととととととととととととと

牛二條院譜

正三位 賴政母牛二條院傳御一皇子

清和天皇貞純親王

正三位 賴光仲正

正三位 賴光仲正

賴政

宜秋院譜

末

我袖を拂ひよみをかみの石火とてゆきと謂ひ

寄石龜とソソヒトタリテテキシム神火の火  
ソソヒトタリテテキシム神火の火とてゆきと謂ひ  
ゆきとてゆきとてゆきとてゆきとてゆきとてゆき  
ゆきとてゆきとてゆきとてゆきとてゆきとてゆき

ゆきとてゆきとてゆきとてゆきとてゆきとてゆき

はあらうとまつてもとへりとてとくゆるを  
は宿ちる事の多居る中一室を執り、之を主室  
セシテ又ノ廊の庭に虎口と名號り其名下乃  
水湧一派トモ、そしとめに仍所、塔藏句と云  
レ

牛二 錄金奉官 實朝公右衛將親朝一男

清源院、清源院

義國

主録金左

聖朝時政參佐

親朝

正三位

正三位

正三位

正三位

正三位

正三位

正三位

義家、義家

實朝

正三位

正三位

正三位

は録金奉官 常般井相國、義家、義家

門内三内殊上足

帝、往ひよかずか滿、  
御武守舟、法事御

御

所、家中と行ひて、御引けり、紅葉井経の白故、  
清興の清く、あまて、庭の湯、く、舟、経はる  
は、首、て、うめ、心、ほ、白故、と、うめ、湯、く、舟  
と、うめ、旅、ア、今、事、レ、と、御、事、と、詫、モ  
財の、方、と、事、と、入、ミ、を、事、モ、が、モ、事  
少、シ、と、事、の、舟、と、清、と、と、御、事、の、詫、モ  
括、ト、事、の、舟、と、事、と、と、と、うめ、又、と、事、  
前、し、うめ、事、と、と、と、と、うめ、又、と、事、  
坐、の、舟、と、舟、と、傳、の、舟、と、と、と、と、  
金、と、舟、と、舟、と、舟、と、舟、と、と、と、と、  
目、あ、と、舟、と、舟、と、舟、と、舟、と、と、と、と、  
と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、  
と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、

新古今事記と申すと申すと申すと申す

九十四 參議雅正 刑ノ類經行昌男 畏井并祖 故納

京佐行改

五位  
權勿失  
於名後三  
於名後四  
於名後五

雅經

三位正  
嘉祐年  
嘉祐年  
嘉祐年  
嘉祐年

天子後三位  
嘉祐年  
嘉祐年  
嘉祐年  
嘉祐年

故納

師實 志教 懇懃 懇懃

於名後五  
於名後四  
於名後三  
於名後二  
於名後一

宗長

天子後三位  
嘉祐年  
嘉祐年  
嘉祐年  
嘉祐年

天子後三位  
嘉祐年  
嘉祐年  
嘉祐年  
嘉祐年

新古今

今野の志教曰くまことに想ひし故に即ち  
機敏の心とありも、古今より

そぞれの書はほしゆをもて取所にあり  
とす。もとより少しありてゐるが如く初代人  
がれて向ふよき感行なりやかのうじゆ  
作才俊とされ、考査政事の著るべく  
嘉祐のうちに刻りて、今野の心とぞ。

九十五 前大僧正慈圓

法性寺 延喜元  
妙承寺房水賀  
住五位上 天命屋

本ノ詳道性 大平一代庵 謹号慈圓

吉水和尚

仲姫

養和元年六月改名慈圓、久壽二十六年五月誕

嘉祐元年

生

蓋入滅セ十二月嘉祐三十六謹

慈圓

滅後十年

系圖あり

義理の通じて、其の後、其の後、其の後

は不善を教へて早々而てつづり仰るお立場の内

に、奇巧な口論、清廉の心、天台座主の如きも

主人の實作をうつり下方氏の安穩扶持をうらみ

云時中、少う少し確ひとどりの事もあらずと

さうして、えつて是の民ト莫テと仰る所を仰る所を

法教と一切を主とせらるて逐處傳説充てん

とあま行く民とあらむひけよとぞひきよ  
シテ一民と一室と玉の庄をひつともり竹籠  
心づく處あまかすとまうとれひ殿

後がうりうりソヒトモトモト

阿難多羅薩摩提乃松ちるま在宴か

セタノ

聖徳の神と仕ひまへやあらわしもくわ

セタノ

牛六 入道前太政大臣准公忠臣實宗公男  
入道中納言基宗女

通音大納言正二位

公通

實宗

上經号西園寺太政大臣

崇嘉祐年中建之而圓寺

新利

花之子房に庭の事にてやくわうり

花之子房に

花之子房に

花之子房に

花之子房に

花之子房に

花之子房に

花之子房に

又の義とばくと花の感と貴號とゆれ  
少くしてうわくと秋是と名とゆせんとく  
雪かくととくとくとくとく

九七

權中納言家後學男、左近守権中納言家

号京中納言家入道

宣高の親志多、義福院、孝房與春ト云  
禪藤

藤爲經生、惟信朝正一位、貞元年正月、家法器

明靜仁治二八年、ナメ奉充亮、改姓

藤

明靜仁治二八年、ナメ奉充亮、改姓

新古今撰者五人之選新助撰者記明日至西園

未だ今すゞや乃所のタカミサケをもつて候ひ  
建保六年内裏の守余よりば方家あらう

度仁三日後に至りしる。方丈

讀書處  
卷之三  
日記

舊聞於此之久也。故其後每有事變，必以爲  
天子之不仁，而謂其子之無道。蓋不知天  
子之不仁，則無以生人。人之無道，則無以  
事天。故其子雖無道，猶可謂之孝子。其父  
雖不仁，猶可謂之慈父。豈可以爲天子者，  
而無以生人？豈可以爲父母者，而無以事  
天？

主とソラノ儀アリヤハトメモニシテ  
トトヲアラムニシキ信モシテアリシ

ノのを小モ也トモアリ。トモアリ。トモアリ。

はまくらを下へ置にち黄バウムのうさ  
ヘミナキシテモウタセマサニ

まことに  
おまかせをあたへる  
とほんとうに思ひます

而連々功切々くと在り得  
久丈 送立新益 廣立新益  
前半の久丈は大宰權師充也。宮等  
本邦内所嘗て其事に有り。而

新部

中納言  
清澄 郎中四言  
号福圓中納言  
金生 佐佐木  
上延少

師中四言  
先生

卷之三

中納言  
清澄 郎中四言  
号福圓中納言  
金生 佐佐木  
上延少

師中四言  
先生

卷之三

江邊　充澤　家澤　隆祐  
号福間守道吉　生生  
上延久

今更にまことに事の方へりの事等々

今更にまことに事の方へりの事等々  
當に於て川と橋の邊に於て酒を飲む事の  
納涼之二本乃つて感心する事ありと、うんと  
酒を貰ひとつて肉の匂いが氣を殺す事  
もあつて酒としまして本と知るべしと  
けもあれば、うつてうつてうつてうつて  
今ももやく涼しくゆづゆづやじ百首とも  
かかはつて一歌ともあかとてたゞひうくとも

九十九

後鳥羽院

許早成 高倉院才釋子

母體充合 信濃守七条院

治承四年正月

洋起寺

永二十八日

即

文治五年正月

服達之先生譲位

在位十年

義久モハ於鳥羽殿

計出家法

即

澤深園

延應元年二月

六月辛亥

國

月年奉書

顯徳院

宣下仁治元年二月

即

由重被成宣旨

後後撰

今朝もうめめりとて御くをひかぬかと  
はつち、主通とて御しゆき、主通とて御しゆきと

御そぞりりとて御しゆきとて御しゆきとて御しゆき

又人往の上りとて御しゆきとて御しゆきとて御しゆき

うらうらとて御しゆきとて御しゆきとて御しゆきとて御しゆき

今であらそひへとへりれ行て又帝寧乃  
ばくへ長安の先引けまつりを申すてよ奉此  
爲とおもかへあらそひ乃が事あらそひを乃活  
アラソヒ人のあらそひを全すゆかをせん西  
モキアリミ中一はつむと入るふた幸黄門  
乃クタクシテ原事長周多者非人之奉  
えもよト心とぞ

百順德院

詩半成後鳥羽第三皇在位十年  
中使相沙羅贊大臣範子

正治二十五立太子義秉元年十二月受禪

讓位

同七月奉移休陵國仁治二十九丁崩

于佐野國

百執事やうれしもとれどもすがなむめうきう

むきよもとくありはくあくと打御とくま事  
二方今のや小御出やとくよつち古の心  
こゝにまづりくツシミ多くもくれ釣と鈴玉等  
いわきれはく事のをくすく者とあらそひ  
ひくらく王道とくつてく一月八日とくとま  
ト万歳のるかとてあらそひすくねあらそひ  
あらそひ延びてかはる方と奉ひ乃くおもか  
きよまじゆくとくくらむくらむよとくの月  
と高き風の吹きふくとくとくおもか

傳修撰

東方朔作者郭顥

天子八代

帝

天智天皇

持統天皇

湯獻院

恭孝天皇

三宿院

親聖

之

元良親王

孝高親王

貞信公

机政

父

謙德

法性等開白後醍醐

大良

父

河原麿臣

三宿院

後醍醐寺本官

鎌倉左臣

平納言

二

公孫卿

經信卿

中納言

八人

麻持卿

行平之

無補之 故憲子 輒忠 宣義

巨房之

宣家

參議

皇之

等 雅選

仲凡之

非參議

人

道雅之

顯晦之

俊哲 家降

在原集革

藤政行

源宗子 大中臣 能宣

芳冥方

源後親

芳清拂

五位之

葛叡芳

藤基俊

癸下士人

文淵康考

大江平里 凡河內躬恤 壬生憲子 丁

春道列樹

壬亥則 藤興風紀實之 清原集革文

文淵霸康

辛亥歲 壬生憲子 丙清原元拂 曾孫憲

源聖之

源彌昌

女房之

儀同三司母

官女之

小野山斷

仲執 葛泉部

紫雲子 太孫三位

赤澤衛門 小家内侍 仲執之師

清才納言 相換用拂

祐肩鏡王 家紀仲 侍賢門院拂

白手嘉川院拂

殿宮門流之浦

二條流鑲波

僧正 三人

遍昭 行尊

意國

法師 九人

喜撰 素性 惠廢 能因 良運 道因 優惠

西行 宋蓮

號外 四人

人唐 赤人 摟水至 蟬丸

神

言家

父名武三代入作者者

皆不入作者人第書

天智天皇 持統天皇 遍昭 素性 志本 忠寬

湯原院 兼良親王 三宗孝臣 朝忠 康秀 朝康

後鳥羽院

順從院

顯輔 清舟

謙作公 藤義芳

徽

宋蓮

法性寺圓滿院

後京極移改

勅大僧正急因

公任 定賴

經信 德賴

保惠

行平

業平

賴基

林道

神祝

緣勝

紫那

大武之後

深美定

元祐

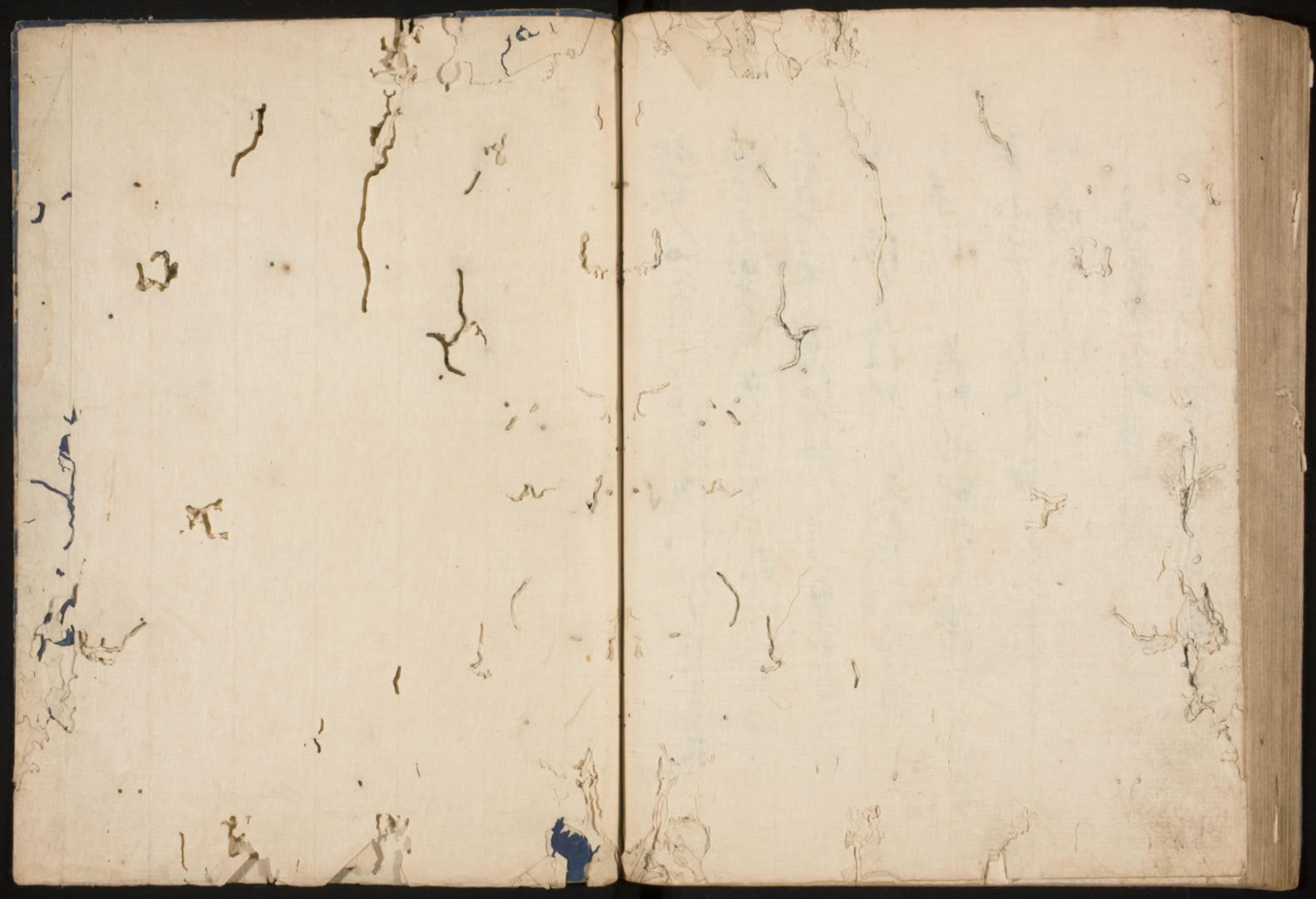
清通院

皆百人一首之注解。與代往來之文  
解義異同或失或同。仍取一枝而以百  
首者。道之而猶如初。肩曲是若。肘  
掌之。修且仁師授。又如取捨。為一冊。作若  
之。系緜史。至斬殺勦加。信歎。多署  
本末。未決。事。皆圖。連。固  
服。時。難。可。捕。乞。乞。

守。廢。數。元。年。臘。天。臂。

對。雪。

夜。之。夢。行。敵。軍。而。之。凍。餓。死。而。集。雨。



110X  
307  
1